

『東北大学大学院の協力による「臨床宗教師研修」開設記念シンポジウム
寄り添うスピリチュアルケアと伝わる宗教的ケア』成果概要

日時：2014年4月24日（木） 13:30～17:00

場所：龍谷大学大宮校舎 清和館三階ホール

参加者：300名

主催： 龍谷大学大学院実践真宗学研究科
龍谷大学人間・科学・宗教オープン・リサーチ・センター

協力： 東北大学大学院実践宗教学寄付講座
上智大学グリーンケア研究所

開幕挨拶 龍溪章雄（龍谷大学大学院実践真宗学研究科長）

●基調講演 グリーンケアと心の救い

高木慶子（上智大学グリーンケア研究所特任所長）

「グリーンケアと心の救い ―悲しみを乗り越える力―」

レスポンス：杉岡孝紀（龍谷大学文学部教授、実践真宗学研究科臨床宗教師研修副主任）、
黒川雅代子（龍谷大学短期大学部准教授、グリーンケア論担当）

●シンポジウム 臨床宗教師の可能性

・提言1

鍋島直樹（龍谷大学文学部教授、実践真宗学研究科臨床宗教師研修担当）

「龍谷大学大学院における臨床宗教師研修構想 ―東北大学大学院に学んで」

・提言2

谷山洋三（東北大学大学院文学研究科准教授、実践宗教学寄付講座臨床宗教師研修担当）

「スピリチュアルケアと宗教的ケア ―東北大学大学院における臨床宗教師研修」

コーディネーター：杉岡孝紀

レスポンス：高木慶子、黒川雅代子

閉幕挨拶 深川宣暢（龍谷大学文学部教授、実践真宗学研究科教務担当）

■成果概要

開幕挨拶

龍溪章雄（龍谷大学大学院実践真宗学研究科長）

大学院実践真宗学研究科は、願いと情熱と勇氣ある宗教的実践者を養成するという教育理念のもとに2009年に設置された。本研究科の教育理念は、阿弥陀仏の誓願、その心を明らかにされた親鸞の人生観・死生観に立脚し、現代社会の諸課題に一人の人間として誠実に応答するために、宗教実践分野と社会実践分野での研鑽を積み、人々の生きる力を育み、人生の羅針盤を提供できるような宗教的人間を育てることにある。現代は、かけがえのない人生といのちを完全燃焼していくには困難な状況を呈しつつある。群萌の一人である宗

教者はいま何ができるのか。宗教者に求められているのは何であるのか。これらは私たちの切実な課題である。宗教者として、仏教が蓄積してきた伝統を継承しつつ、他方、伝統という名の鎧を脱ぎ捨てて、人々の苦悩と悲歎に虚心坦懐に耳を傾け、寄り添い、阿弥陀仏の大いなる願いに生かされ、そのぬくもりが伝わることを志向している。

このたび東北大学大学院文学研究科実践宗教学寄附講座の鈴木岩弓教授、谷山洋三准教授、高橋原准教授の連携協力を得て、本研究科においても、2014年度から臨床宗教師研修を始めさせていただけることになった。あわせて、宗教的实践と研鑽を積み重ねてきた上智大学グリーンケア研究所の協力を得て、グリーンケアと心の救いを学ばせていただくこととなった。基調講演者の高木慶子先生は、阪神淡路大震災の被災者、JR福知山脱線事故の遺族へのグリーンケアとJRへの心のケアなどに尽くし、上智大学グリーンケア研究所を設立し、小学校、中学校、高等学校の教育現場で活用できる「生と死の教育」カリキュラムとビデオを制作し、命の尊さをわかりやすく大人や子供に伝えている。本シンポジウムには、上智大学グリーンケア研究所長、島菌進教授、伊藤高章教授にも来学いただいた。先生方にご臨席賜り、厚く御礼申し上げます。このシンポジウムが皆様とともに実りあるものとなるようにご協力くださることを願ってやまない。

高木慶子（上智大学グリーンケア研究所特任所長）

基調講演「グリーンケアと心の救い ～悲しみを乗り越える力～」

人間の不完全さと大いなるものの支え

人の悲しみをそばで支えることは生きる力をうみだすものの、人が人を支えることには限界や不完全さがある。だからこそ、人知を超えた大いなるものの支えを感じる事が重要である。グリーンケアはスピリチュアルケアである。公共空間において、ケア対象者の心の支え、信仰を再確認して生きる力をわかせる臨床宗教師が求められている。

実に多様なグリーフの理解

グリーフとは、大切なものを失うことによってもたらされる心の状態、喪失による悲しみの感情ととらえることができる。だれもが家族や親しい人を亡くせば、淋しい悲嘆を体験するものであり、悲嘆そのものは病的なものではない。悲嘆感情には、精神的衝撃やパニック、いらだち、無念さ、罪悪感などが複雑にからみあう。悲嘆が及ぼす身体的罹患には、睡眠障害、食欲の減退、耳鳴り、頭痛、目のかすみ、めまいなど多様な現れ方をする。この悲嘆の領域には、狭義と広義がある。狭義の悲嘆には、(1) 愛する家族や親せき、友人を亡くす。死別、離別、裏切り、(2) 健康の喪失がある。広義の悲嘆には、(1) 所有物の喪失、(2) 環境の喪失、(3) 公認されない関係者との死別、離別、中絶などの喪失、(4) 自尊心の喪失、仕事の失敗などによる名誉・立場の喪失、いわれのない中傷、(5) 福島県の放射能汚染の現実が示すように、安全・安心の喪失、(6) 社会的な差別による喪失などがある。広義の悲嘆は日常の生活の中で、しばしば経験することである。人生のほとんどの時期が、喪失体験の連続であるといっていいただろう。人生はどれほど幸せに満ち

ているようでも、心の片隅で不安を感じていることも多い。この不安こそが「完全な幸せ」を実感しつづけることのむずかしさを示している。常に何かに欠如している状態が、人間の存在であり、完全で存在ではないという体験である。

グリーフケアの意義と課題—スピリチュアルケアとの接点

グリーフケアとは、さまざまな悲嘆を慰め支えあって、悲しみを乗り越えていくことである。人生における喪失にともなう悲しみ、苦しみを乗り越える力は各自に備わっていると考えられる。しかし、その力を生かすためには、他者からの支えと励ましが必要である。しかし最終的で完全な望みが人間の力のみで満たされることはなく、人知を超えた「おおいなるもの」の力をおかりし、助けをいただかなければならないことに気づかされる。そこにおいてグリーフケアの限界と、人間の不完全性を知ることになる。グリーフケアの最大の課題は、「グリーフケアがスピリチュアルケアである」といわれる原因がここにある。グリーフケアだけでは、最終的な心の救いにはならないことをグリーフケアに携わっている者は体験している。「最終的な救い」には、なんらかの「おおいなるもの」の存在が必要となるからこそ、宗教者によるスピリチュアルケアが必要とされるだろう。

鍋島直樹（龍谷大学文学部教授）

提言1 「龍谷大学大学院における臨床宗教師研修構想 —東北大学大学院に学んで」

龍谷大学大学院実践真宗学研究科では、東北大学大学院・実践宗教学寄附講座に協力いただき、心のケアを実践する「臨床宗教師」を養成する大学院教育プログラムを、2014年4月から開設することになった。その「臨床宗教師研修」目的、特色、スピリチュアルケアと宗教的ケア、具体的目標、プログラムについて紹介した。

東北大学大学院における臨床宗教師研修の目的

「臨床宗教師研修」は、2012年4月に、東北大学大学院文学研究科実践宗教学寄附講座（Department of Practical Religious Studies, Graduate School of Arts and Letters, Tohoku University）に創設された画期的な大学院教育研究プログラムである。東北大学文学部教授の鈴木岩弓は、臨床宗教師養成の目的について、次のように意義づけている。

「2012年4月より、東北大学大学院文学研究科に「実践宗教学寄附講座」が設置されました。本講座は、広い宗教性に基づきつつ超宗派・超宗教的な立場からの人々の「心のケア」を実践する宗教者、即ち「臨床宗教師」を養成するための教育システムを、理論と臨床を統合した形で明示することを目指しています。2011年3月に勃発した東日本大震災以後、日本中からさまざまな宗教者・宗教団体が積極的に被災者支援の活動を行い、注目されてきました。そうした中には、布教伝道を目的とせず、時には異なる宗教的背景をもつ宗教者同士が協同のもとで行う宗教的ケアの場が見られ、被災者に大きな勇気を与えてきました。・・・臨床宗教師研修では、宗教者として全存在をかけて人々の苦悩や悲嘆に向き合い、そこから感じ取られるケア対象者の宗教性を尊重し、公共空間で実践可能な「宗教的ケア」を学ぶことを目的としています。」

臨床宗教師の特色と役割—宗教者に求められているもの

「臨床宗教師」とは、欧米におけるチャプレン (chaplain) の日本語訳である。チャプレンを「臨床宗教師」と呼称したのは岡部健医師らである。欧米におけるチャプレンとは、長い歴史と研鑽を積んできた宗教教団に認定された聖職者 (神父、牧師、司祭、僧侶) が、医療、社会福祉、教育、軍隊、警察、消防、刑務所、企業などの公共機関において、人々の苦悩や悲しみに真摯に耳を傾けて、心の相談に応じる人をさす。臨床宗教師は、日本人の文化と宗教性を重視する日本版チャプレンである。

医師、看護師、臨床心理士も治療と心のケアを行う。それならば、臨床宗教師の特色や役割とは何であろうか。その答えを、岡部健と鈴木岩弓の言葉が示してくれている。臨床宗教師には、死という暗闇に降りていく人々に、道しるべを示すことのできるような役割を求められているといえる。また、臨床宗教師には宗教的中立性が求められている。

龍谷大学大学院における「臨床宗教師研修」開設

東北大学大学院の「臨床宗教師」養成の目的は、龍谷大学大学院実践真宗学研究科の理念と方向を同じくする。龍谷大学において、2013年5月29日、東北大学大学院の谷山洋三准教授による特別講義「東北大学大学院実践宗教学寄附講座における臨床宗教師養成の取り組みの意義と目的」を開催し、龍谷大学文学部教授の深川宣暢はその意義をこう語った。

「宗教研究の世界では、ここ数年来、宗教の社会貢献や公共性がテーマになってきていました。そこに東日本大震災が起これ、その際に人々が整然と行動し、互いに譲り合い、他者を思いやる姿を見て、特に注目されてきたのが、宗教の「ソーシャル・キャピタル (社会関係資本)」という概念です。宗教がいかにしてソーシャル・キャピタルになるのか、また今後もそれを生み出し構築することができるのかが重要なテーマになっています。この状況の中で、国立大学である東北大学に「臨床宗教師」養成の講座が開設された意義は大きなものがあり、今後の実践真宗学研究科の教育・カリキュラムの充実のために大いに資するものであります。」

こうして同年7月10日に、2014年度から、東北大学大学院の連携協力によって、龍谷大学大学院で「臨床宗教師研修」を実施することが大学院実践真宗学研究科の教授会において承認された。龍谷大学大学院の教員、大学院生も、実践宗教学寄附講座運営委員会の「臨床宗教師倫理綱領」を守ることを関係者と確認し合った。

「臨床宗教師倫理綱領」(2012年9月20日制定)には、臨床宗教師がめざす姿勢、公共空間で守るべき事柄が記されている。その一部を取り上げると、次の通りである。

- <ケア対象者の人間として、個人としての尊厳を尊重する>
- <人種、性、年齢、信仰、国籍等によって差別しない>
- <ケア対象者の信念、信仰、価値観の尊重>
- <臨床宗教師自身の信仰を押しつけない>
- <ケア対象者に関する情報の守秘義務>

スピリチュアルケアと宗教的ケア

(1) スピリチュアルケア

スピリチュアリティとは、人生の意味、自己の存在意味を求め、自ら感じたり、人や自然から与えられたりする心であり、誰もが有している。スピリチュアルな苦痛とは、老病死の苦しみが迫り、自己を喪失していく時に、「なぜ私がこんな目にあわなければならないのか」「私の人生は何だったのだろうか」という生きる意味への問いとなってあらわれる。それは真実の依り所、救いを求める宗教の領域に関わっている。ではスピリチュアルケア (spiritual care) とはどのようなケアであるのか。東北大学大学院「臨床宗教師研修」において、谷山洋三は次のようにも明かしている。

「スピリチュアルケアとは、自分の支えとなるものとのつながりを再確認、再発見することを通じて、生きる力を取り戻す援助、または、セルフケアである。」

この谷山のスピリチュアルケアの定義は、死の看取りの臨床経験を積み重ねて生まれたものである。したがって、スピリチュアルケア、心のケアとは、未解決な問題を解決し、自己の支えとなるものとのつながりを再確認することを通して、生きる力を育む援助である。ケアの原点に、「何かをすることではなく、そばにいてことである (Not doing but being)」という言葉がある。絶望的な状況におかれている人に、何もできなくてもそばにいて、手を握ったり、話すのを聞いたりするだけで支えになることをこの言葉は教えている。また、悲しみに沈んでいる人が、苦境の中で示す優しさや深き願いに看取る人々は多くのことを学ぶ。このようにスピリチュアルケア、心のケアとは、全人的な苦しみにあえぐ人のそばにいて、うれしかったことや辛かったことの物語に耳を傾け、様々な面を持つその人の人生をまるごと認めることであるといえるだろう。

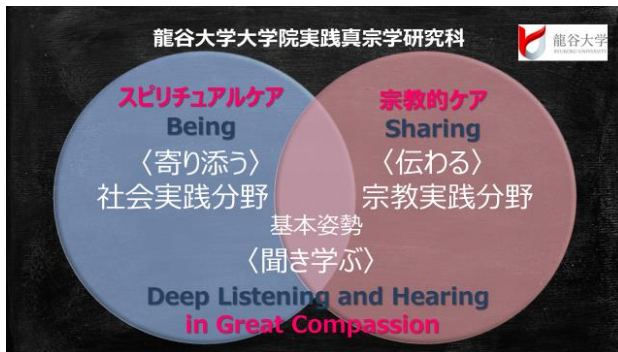
(2) 宗教的ケアとは

幾世紀にもわたって何億人もの人たちが、さまざまな地域の宗教から計り知れない恩恵をこうむってきた。宗教者の社会的実践が、孤独の中にある人々の苦悩や悲嘆にぬくもりとなって届き、生きる勇気と希望を与えてきた。

宗教的ケアとは、宗教者の依りどころである宗教的救済観を礎にして、ケア対象者に求められた場合に、相手の悲しみに応じた答えや気づきを提供することである。宗教者自身の技術や能力によって相手を支えるのではない。宗教者自身が、生死の迷いを超えた大いなるものに照らされ、神の愛、仏の大悲に抱かれながら、相手の苦悩に向き合っていくことである。



このスピリチュアルケアと宗教的ケアの相関図は次の通りである。



このスピリチュアルケアと宗教的ケアの相関性について、上智大学グリーンケア研究所所長の島菌進は、こう提言した。

「宗教的ケアは、宗教的な形があるから真心がこもっている。災害支援ボランティア活動など悲しみに寄り添うスピリチュアルケアは、宗教的な形がないところに宗教的なものがある。」（2013年11月シンポジウム、龍谷大学響都ホール）

この助言は、宗教的ケアにもスピリチュアルケアにもそれぞれ意義があることを気づかせてくれる。伝道布教や宗教行事には、伝統文化を継承してきた形があり、その聖なる形に真心がこもっている。同時に、被災地での物資支援、流入物撤去、家具の片づけ、カフェモンクなどのお茶会をしながら、被災者の思いに耳を傾けるスピリチュアルケアも、宗教性を有しているということである。

宗教に求められているものは、さまざまな人生の困難に出会った時にいつでも依り所となる真実、特に死に直面した時にも、たよりとなるようなゆらぎない究極的な解決を指し示すことである。昭和大学病院緩和ケアチームの高宮有介医師、あそかビハーラ病院医師の大嶋健三郎院長は、緩和ケアにおける基本姿勢をしめす言葉を次のように示してくれた。

“Do not curse the darkness, but light a candle.”

「暗闇を罵るのではなくて、灯りをともそう」

こうした姿勢が臨床宗教師に求められている。

谷山洋三（東北大学大学院文学研究科准教授）

提言 2、「スピリチュアルケアと宗教的ケア 東北大学大学院における臨床宗教師研修」
医療者・遺族・被災地の声

医療者の宗教者に対する声には、「暗闇に降りていく道しるべを示してほしい」「病棟にいてくれるだけでほっとする」という意見とともに、「何をするかわからない」「押しつけがましいことは困る」などの心配する意見もある。遺族や一般の人のニーズには、近年、宗教的背景をもつ緩和ケア病棟五施設を利用した遺族にとって役に立った宗教的ケアとして、「牧師・僧侶・チャプレンなどの宗教者に会う」86%、「礼拝や仏事に参加する」82%、「宗教的な音楽を聴く」80%などがある。また、「死に直面した時、宗教は心の支えとなるか」という質問に対し、「なると思う」が 54.8%あり、徐々に増えている。被災地の声に、

カフェデモンクについて、「和尚さんと話すとはっとする」「坊さんと牧師さんが一緒に活動するっておもしろい」などの声がある。

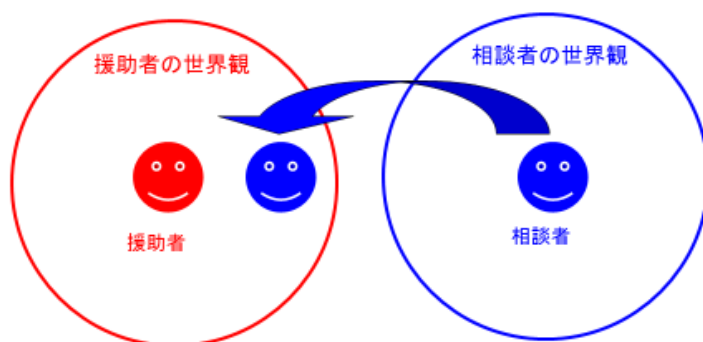
宗教とは—成立宗教と民間信仰

宗教学から宗教をみると、仏教、キリスト教、イスラーム、神道といった「成立宗教」よりも、もっとベーシックな信仰があるといわれる。それが民間信仰である。民間信仰の形態は、祭礼、自然崇拝、祖先崇拝などがあり、死にまつわる民間信仰的な語りには、「お迎えが来る」「あの世」「お盆に先祖が帰ってくる」「死者が見守ってくれる」「先祖がたたる」などがある。たとえば仏壇には二重性がある。一つは仏教の教え・成立宗教に礼拝している側面であり、もう一つは、祖霊の依り代・民間信仰に礼拝している側面である。このようにケア対象者の多くが、民間信仰を実践していると考えれば、ケア提供者は民間信仰を深く理解し、受容すべきであろう。

スピリチュアルケアと宗教的ケア

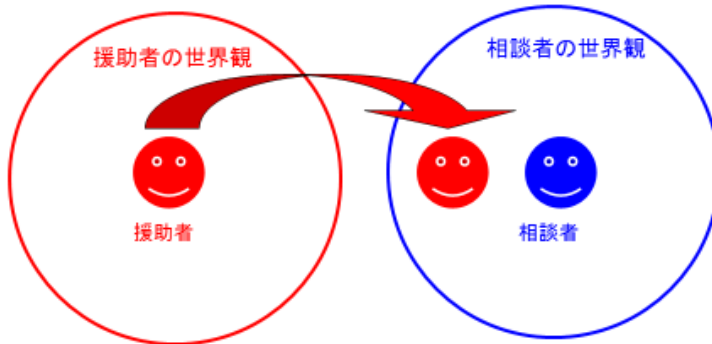
スピリチュアルケアの構造図によって自己をふりかえってみると、自己、わたしを支えるものに、内的次元では、自分自身、現実的次元では、人や事、超越的次元では、真理、神・仏、先祖があることに気づかされる。スピリチュアルケアと宗教的ケアは、○自己の支えとなるものを再確認・再発見することで、生きる力を取り戻す援助、もしくはセルフケア、○スピリチュアリティ（非合理的な体験・感覚に意味づけをする機能）によるケアである。スピリチュアルケアは、表現方法が自由、ケア対象者の気づきを待つ、助言はすることはあまりない。宗教的ケアは、表現方法は宗教的、ケア対象者が気づきもしくは答えを提供する。宗教的行為そのものがケアになる。スピリチュアルケアと宗教的ケアの関係性については次の図を示される。

宗教的ケアにおける 援助者と相談者の関係



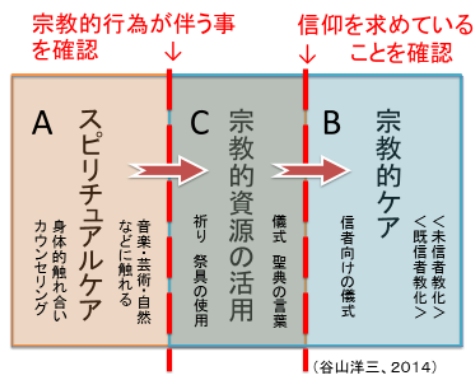
谷山洋三「スピリチュアルケアをこう考える—スピリチュアルケアと宗教的ケア」(緩和ケア、19-1)¹⁹⁾

スピリチュアルケアにおける 援助者と相談者の関係



谷山洋三「スピリチュアルケアをこう考えるースピリチュアルケアと宗教的ケア」(緩和ケア、19-1)²⁰

スピリチュアルケアと宗教的ケア



(谷山洋三、2014)²³

スピリチュアルケアと宗教的ケア、どちらにしてもまずは相手の思いを聞くことから始まる。両者はともに「自身の支えとなるものを再確認・再発見することで、生きる力を取り戻す援助もしくはセルフケア」である。スピリチュアルケアは援助者が相談者の世界観に入り込んで行うケアであるのに対して、宗教的ケアはむしろ相談者が援助者の世界観に入り込んで行うケアである。この両者の間の共通領域を見極め、自覚的に活用することが臨床宗教師には求められる。

臨床宗教師には宗教的知見と、それを相談者に押し付けない自制心、そして何より人間存在の根本的なスピリチュアリティに対する深い洞察が求められる。もちろん、それらを尽くしてもなお、人は人を救えないという限界がある。しかしその限界をかかえたまま、宗教者もケア対象者も「大いなるもの」に支えられている。